

[平成 17 年度普及に移す技術]

[普及に移す技術名] 樋型ドレンベッドを用いたトマト「越のルビー」の少量培地栽培

[要約] ミディトマト「越のルビー」の少量培地栽培は小型の樋型ドレンベッドを用い、培地は培養土とピートモスを配合する。ベッドは赤外線フィルムとアルミ蒸着フィルムの 2 枚で被覆すると夏の高温は回避できる。

[キーワード] ミディトマト、越のルビー、少量培地

[担当] 福井園試・野菜花き研究グループ

[連絡先] 電話 0770-32-0009、電子メール enshi@pref.fukui.lg.jp

[分類] 参考

[背景・ねらい]

低地水田地帯は地下水位が高く、トマトの地床栽培では果実の品質劣化が問題となる。特に、ミディトマト「越のルビー」は糖度の低下を招き易い。このため、湿害や連作障害の懸念が少なく、管理も容易な少量培地栽培技術を組み立てる。

[技術の内容・特徴]

1. 栽培槽はプラスチック製樋型ドレンベッド（長さ 1.2m、幅 34cm、深さ 17cm、培地容量 30L）を用いる。苗は 1 ベッドに 3 株を定植する（株間 40cm）。栽培槽は赤外線フィルムとアルミ蒸着フィルム(遮熱シート)の 2 枚で被覆し、アルミ蒸着フィルムは取り外しができるように配置する。施肥は点滴灌水チューブを用い灌水同時施肥で行う。また、pF 計センサーを使い灌水制御を行う（図 1）。
2. 栽培槽は赤外線フィルムと金属蒸着フィルムで 2 重に被覆すると、培地の温度較差は小さくなる。強い日射下で培地温度が急激に上昇する時期は、アルミ蒸着フィルムで被覆してトマトの根の高温障害を回避する（図 2）。
3. 培地に使用する培養土は水田土壌（グライ土）と山土（岩屑土）のどちらでも大差はない。培地はこの培養土とピートモスを混合する。培養土とピートモスの混合比は容積量で等量とする。この場合の一株当たり収量は 2.4～2.7 kg となる（表 1、図 3）。

[技術の活用面・留意点]

1. 水田地帯のミディトマト栽培に活用できる。
2. 同一培地における連作は 5 回繰り返したが、連作障害は発生していない。
3. 赤外線フィルムは通年被覆するが、アルミ蒸着シートは低温期には被覆しない。
4. 施肥は市販の養液栽培用肥料を使い、所定処方 0.3～0.5 単位で使用する。この場合、栽培期間を通した施肥窒素の総量は一株当たり 8～11 g となる。
5. 過剰な灌水は果実の裂果を発生させるので、雨天時の灌水は行わない。
6. 排液は硫黄石灰石粉混合造粒物を利用した脱窒槽で処理する。
7. 栽培槽と灌水チューブの施設経費は 1 a 当たり約 11 万円となる(肥料混入機は含めず)。

[具体的データ]

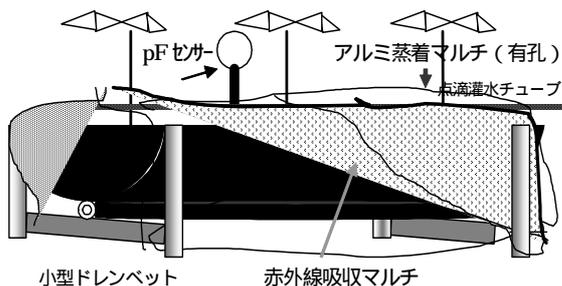


図1 ミディトマト少量培地栽培の設置図

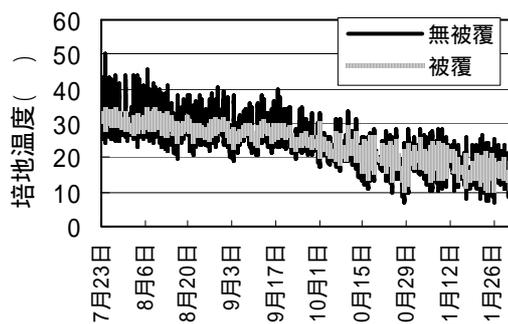


図2 2枚の被覆資材(赤外線フィルム+アルミ蒸着フィルム)で被覆した栽培槽と無被覆栽培槽の培地温度の推移

表1 ミディトマト少量培地栽培における土およびピートモスの配合割合と生育の状況

(2003年・抑制栽培)

土の種類およびピートモスとの配合割合	一株当たり収量(g)	糖度(Brix%)	総果数(個)	尻腐果率(%)
田土(グライ土) 5割:ピートモス5割	2,704	7.5	76.9	1.2
山土(岩屑土) 5割:ピートモス5割	2,508	7.8	74.9	1.0
田土(グライ土) 7割:ピートモス3割	2,486	7.6	75.1	1.2
山土(岩屑土) 7割:ピートモス3割	2,418	7.9	77.3	1.4

注) ピートモスは保水剤として使用した。各区8株の平均値

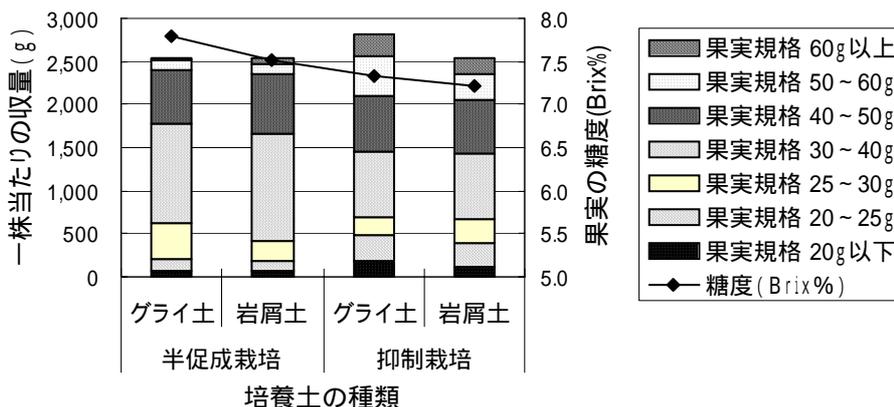


図3 ミディトマト少量培地栽培における培養土の種類と収量・果実規格・糖度の比較(2004年)

注) 培養土は土5割、ピートモス5割の割合で等量ずつ配合している。各区8株の平均値。